艦船修理廠 太平洋の要 第七艦隊の艦船を常に機能できる状態に保つ

横須賀の海岸線と深い入り江は、江戸時代以来、太平洋を横断する船にとり自然の良港となってきました。横須賀は横浜の南、東京湾の入り口に位置しています。封建国家であった日本に対し、1853年、ペリー提督と彼の率いる黒船の艦隊が西洋への門戸を開くよう求め歴史的な上陸を行った場所も、この横須賀の近くにあります。ペリー提督に続き1865年には、徳川幕府の招きで若きフランスの技術者ベルニーが来日しています。ベルニーは幕府勘定奉行小栗上野介とともに横須賀製鉄所の建設に着手し、それは世界でも有数の造船施設となりました。第二次世界大戦のさなか、この旧帝国海軍の横須賀工廠は約4万人の従業員を擁し100隻以上の艦船を建造しました。

こんにち、太平洋諸国との協力関係に向けた日米共通の関心は、横須賀における米海軍の存在により、再び強く結び付けられています。横須賀にある米海軍艦船修理廠と九州の佐世保にあるその支部は、米海軍が太平洋において行動する上で重要な拠点となっています。艦船修理廠は米海軍の日本での造修基地となっているのです。今はグレーに塗装された第七艦隊の艦船がペリー提督の黒船にとって代り、太平洋上に常に監視の目を光らせています。また日本の海上自衛隊の艦船とともに日本沿岸のパトロールの任務にも就いています。米海軍の戦略の一部として、旗艦であるブルーリッジをはじめとした18隻の第七艦隊艦船が、横須賀と佐世保に前方展開されています。第七艦隊艦船の乗組員は多くの困難に耐え、インド洋や太平洋上のパトロールの任務に就いています。この彼らの苦労は、艦船がこれらの基地で補給や修理を受けている間、家族や恋人と一緒に過ごすことによって、大きく癒されるのです。また、艦船は遥か米国本土にまで戻る必要がなく、燃料、時間そしてメンテナンスの費用を大幅に節約できることとなります。

西太平洋における日本の戦略的位置は、米第七艦隊の作戦上、理想的な拠点となっています。日本は、太平洋地域の安定という日米共通の利益を追求するべく、米海軍に基地を提供しているのです。日米安全保障条約に基づき、日本は在日米軍の経費の一部を負担しています。日本政府は労務管理経費として日本人従業員の労務費の多くを負担しています。これは、横須賀と佐世保で行われる艦船修理の費用を抑える役割を果たしています。実際、横須賀と佐世保では要求されるすべての艦船の修理と近代化工事を実施する技術力を有しています。いかなる艦船も航海中緊急事態に遭遇した場合、横須賀や佐世保で速やかな修理を受けることができ任務の遅れを最小限にとどめることができます。

横須賀の施設の中には6つのドライドックが含まれています。これらのドライドックは第二次世界大戦前に旧帝国海軍により建造されたもので、当艦船修理廠の修理業務を支えるため改修が重ねられてきました。ドライドックの中でも最大のもは、24万トンの容積と399メートルもの長さがあり、米海軍最大級の艦船も収容可能な大きさを誇ります。旧帝国海軍最大の軍艦である航空母艦「信濃」もこのドライドックで建造されました。多国籍職員及びたゆまぬ施設改善と

が、艦船修理廠を、西太平洋に展開する米海軍にとって不可欠な造修施設としているのです。第七艦隊所属の強襲揚陸艦の基地である佐世保は、その規模が横須賀基地よりも小さいのですが、横須賀の支援と近隣造船会社の人材活用により、艦船修理廠支部としての重要な役割を果たしています。現在、横須賀と佐世保ではさまざまな施設を建設中ですが、これらは両基地の不可欠かつ世界的な艦船修理能力を保つために結ばれた、米国と日本との公約の証です。佐世保ではこの湾を埋め立て、強襲揚陸艦級の艦船と将来のドック型輸送揚陸艦に対応する450名収容の兵員宿舎と接岸岸壁を建設する予定です。

しかし、艦船修理廠の最も重要な財産は建物や施設ではありません。それは日本の工業社会の誇り高い伝統として生きる職人氣質と自信を持って仕事を完成させる技術力を持つ日本人従業員なのです。彼ら従業員の「何でも出来ます」という標語は、困難で複雑な問題を解決することのできる資質を適切に表しています。そして、人材も多く、設備も整った米国の造船所に比べ、より速く安いコストで修理を行うことができるのです。ジャイロコンパスの調整であろうと、可変ピッチプロペラの修理であろうと、すべての従業員が日々心がけていることは作業の信頼性です。これは勿論、品質を単なるスローガンに終わらせるのではなく、むしろたゆまぬ作業プロセスの改善と、より良いコミュニケーションを通して品質を高めようとしている日本にあっては、決して驚くべきことではありません。横須賀や佐世保に寄港する艦船は、長年にわたり米海軍に与えられてきた信頼感をより深めることでしょう。なぜならそこには、我々の顧客である第七艦隊の要求や解決すべき問題に焦点を合わせ、海軍艦船への修理プロセスが機能するよう細心の注意を払い、そして、艦船の要求を満たすことへのあくなき追求の姿があるからです。質の高い仕事、新しい技術の導入、そして米海軍の中でも最も優れた艦船修理及び改装工事を行う部隊であるという評価、これらが艦船修理廠の基本原則なのです。同様に、これらの原則が、安全対策への十分な配慮と環境保全のリーダーたらしめているのです。艦船修理廠は米海軍長官から海軍で最も栄誉ある安全表彰を繰り返し受賞しています。環境の保全は我々のビジョンの中でも最も重要なものです。

従業員に対する我々の責務は、彼らの仕事の随所に反映されています。従業員は勤勉で改革の熱意を常に持ち、日々の業務に励んでいます。例えば、優れた技術は、ガスタービンエンジンの修理にも発揮されており、故障箇所の発見からエンジンの交換、オーバーホールにまで及びます。ダイバーの生命維持のための装置「クリーンルーム」は、この艦船修理廠で設計され作られた、技術の粋とも言える最新機器です。新しいクレーンの稼働により造修作業現場での効率が高まりました。又、米海軍艦船システム部から発行されている各種の作業マニュアルには、横須賀で開発された方法が多く採用されています。艦船修理廠では、勤勉さと協調の精神が最大限発揮され、大きな海軍造船所で見られる煩雑な作業手順が極めて集約された形で実施されています。艦船修理廠への信頼は、伝統を尊重しつつ、作業の質的向上の為に全社的品質管理活動を推進している新しい世代の日本人監

督者に負うところが大きいのです。かれら監督者が「何でも出来ます」の精神を具現化していると言えます。将来の監督者は、新しい時代の幕開けにふさわしく作られた訓練生制度出身者の中から生まれることになるでしょう。これは、艦船修理廠が太平洋地域での影響力を持ち続ける時代を意味しています。その訓練課程には、日本で最も優れていると思われる英語の語学訓練も含まれています。これは米国国防省の語学教育機関からの派遣と艦船修理廠で採用したインストラクターにより行われています。

艦船修理廠では2千名を超える日本人が監督、技能並びに技術職に就き、約250名のアメリカ人軍属、軍人とともに一体となり緊密な関係を作り上げています。仕事を通して証明された協調の精神は、仕事を離れた文化交流の場でも発揮され、新しい年の幕開けを祝う新年式、夏の盆踊りや障害者のための施設でのクリスマスパーティーといった機会にもその精神が培われています。横須賀艦船修理廠と佐世保支部で働く従業員の、仕事に対する誇りと真摯で熱意ある姿勢、これこそが艦船の複雑かつ精巧な兵器を維持しているのです。そして、それは我々にとって日々の生活の一部となっています。

太平洋の要である米海軍艦船修理廠の新たな一日が始まります。